



うららかな日差しが差し込む狭い自室のなかで、由美は少し固めの革張りソファに腰掛けながら見るともなく女性雑誌を捲っていた。自分で買ったものではない。先程外出した際偶然出会った隣人が何故かそのとき持っていて、自分は今もう読んだからといって由美にくれたのだ。

由美は雑誌など購入しない主義だし、特にこういった週刊誌は、あることないこと滅多やたらに書き連ねていて、ちょっとした読み物としてはあまりよろしくないだろうと思い込んでいたので、滅多に読む機会などはない。今回も、くれると言われたとき最初は読まないからと断ろうとしたのだが、コンビニなどで立ち読みすらしないので、こういう機会を逃しては一生読まずに過ごしてしまうだろうと思った。

何でも経験は大事だというのが由美の信条なので、いっちょ暇つぶしに読んでやろうじゃないかと思い立ち、譲りうけたというわけだ。ただページを捲るという作業だけでも、客人が来るまでの僅かな時間を潰すには打ってつけだ。

ずれてきたフレームのない眼鏡を右手でかけ直した。

控えめな風が、由美の長い髪をさらりとなぜた。

インターホンが響いた。

由美は雑誌から顔をあげ、よっこらしよとソファから腰をあげる。言ってから、苦笑する。自分も年だなあ、なんて認めたくもないことを一人ごちる。

通話ボタンを押す前に、ドアホンのモニターを一瞥する。モニターに映っている二人の人物のうち一人は、由美が予め予想していた人物だった。もう一人の方は、話には聞いていたが初めて目にする。

通話ボタンを押して、はい、と声に出した。

あ、宮沢です、と訪問者は答える。機械ごしではあっても、記憶を呼び起こすには十分懐かしすぎる声音だった。こちらからは相手の様子が見えていても、相手からはこちらの様子は窺えないというのに、いや、むしろそれ故だろうか、嬉しくて微笑んでしまう。少し待っていて、という声が自分でも分かるほど弾んでいた。

機械ごしの通話を終了して急いで玄関に向かう。つまみを捻って鍵をあげ、キーチェーンを外す。ぱっと外開きのドアを開くと、前には二人の人物が立っていた。

「久しぶり、美菜」

由美のよく知っている方の女性が、はにかんだように微笑んだ。

「久しぶり、由美」

「この子が、恵那ちゃんね」

挨拶はそこそこに、確認するまでもないがそう言って美菜の隣に立つ少女に視線を向けると、恵那という名の少女はぺこりとぎこちなく頭を下げた。

「こんにちは」

少しばかり舌ったらずの、いかにも女の子らしい、可愛らしい声音だった。

「こんにちは。さあ、こんな所でなんだからはやくあがってあがって」

「あ、ありがとう。恵那、上がらせてもらおう」

美菜が恵那の背中に軽く手を添えて促すと、恵那は無言でこくりと頷いて玄関に足を踏み入れた。表情という表情が浮かんでおらず、一体何を考えているのか分からない。

さりげなく恵那を観察しながら、ふうん、と由美は思った。

香坂恵那は、由美に促されるまま椅子に座った。ソファの横にひとつ置いてある、背もたれのない椅子である。座ってしまうともうそれで自分のなすべきことは終わったとでもいうかのように、何の反応も示さない。始終無表情で無言のままだ。

視線はどこを見ているのやら、焦点が定まっていないという訳でもないのに、分からない。

視界に映るものを見ているようで見ていない。そういった表現が一番適切かもしれない。

由美の高校時代からの友人である宮沢美菜は、隣のソファに腰掛けて、そんな恵那を時々困ったように見やりながらも、由美との会話に懐かしみを覚えて、彼女との再会を心から喜んでいた。

なにせ大学を卒業して以降四年間、一度も会っていなかったのだ。電話やメールのやりとりは結構頻繁に行っていたが、直接会って話すのとはまた違う。美菜は由美との会話を楽しむあまり、本来の目的を忘れてしまうところだった。

思い出したのは、恵那が控えめに美菜の薄黄緑色のカーディガンの裾を引っ張ったからだった。その動作を見て、由美もはっとする。

「いけないいけない。つい昔の話に花が咲いちゃった」

由美が、いたずらが見つかったお転婆少女のようにぺろりと小さく舌を出す。出してから、もうそんなことをして許される年齢ではなかったと思出す。しかしこの場にいるのは昔なじみの、気のおけない友人である美菜と恵那だけなので、まあいいかと自分で自分を許す。

「ごめんね、恵那ちゃん。今日は恵那ちゃんのことでも美菜、来てくれたのにね」

苦笑しながら恵那に視線を向けると、恵那の二つの黒い瞳がゆっくりと由美を捉えた。まるで茫とした霧が周囲にたちこめていて視界が悪いからとでもいうように、彼女はわずかに目を細めた。その様子に、私の姿を捉えるのに苦労しているようだと思はれる。いや、自分だけじゃない。彼女は傍にいる美菜の像でさえ、その目に映すのに困難を感じているかのようだった。

職業柄、由美は既に恵那の「分析」を始めていた。

「分析」といっても、由美の場合、精神科医やカウンセラーのように「論理的」にクライアントの性質や心の動きを「分析」するわけではない。あくまで感覚的・直感的なものである。

より詳しい「分析」はこれから徐々に時間をかけて行っていくつもりではいるが、一応クライアントの第一印象からある程度「治療」の方向性を把握しておきたいのだ。彼女は自分の仕事にプロとして誇りを持っていたし、それ故に一人一人のクライアントに対して真摯に接することを自らに課していた。

スピリチュアルカウンセラー。それが、彼女の現在就いている職種名だった。

スピリチュアルカウンセラーとは、カウンセラーとつく以上、カウンセラーのようにクライアントの各種の悩みや心理的問題などの相談に応じ、解決のための援助・助言をする職種であることは間違いない。

ただし、スピリチュアルカウンセラーはカウンセラーとイコールの関係ではない。

互いに共通の要素は持っているものの、似て非なるものなのである。現に由美はカウンセラーの資格を持ってはいないが、スピリチュアルカウンセラーの資格はちゃんと所持している。

スピリチュアルという言葉から大方予想がつくであろうが、スピリチュアルカウンセラーは精神や霊魂といった面からクライアントの問題に取り組んでいく人々のことを指す。

ほんの数十年前までは、霊やら天使やら悪魔やらは一般的には受け入れられていなかったから、スピリチュアルカウンセラーというと世間からは奇異なものを見るような目で見られていた。

怪しい新興宗教と思われ、スピリチュアルカウンセラーに対する世間の風あたりは強かった。

特に科学を絶対として無条件に信頼している人々は、霊界や天国や地獄といったものは単なる想像上のものでしかなく、実際に存在するはずがないとしてスピリチュアルカウンセラーに迫害じみた行為を行う事件もしばしば起こった。

ニュースはそういった事件を面白おかしくスクープした。

精神的迷惑を被った常人が、変人に恐怖をなして仕返しをした、という具合に。

化学を絶対的に信望する世間一般の人々は、「スピリチュアル」と名のつくものに対して蔑みの視線を向けていた。

しかし、それも今となってはもう昔の話。由美がスピリチュアルカウンセラーとして働いている現代では、由美らスピリチュアルカウンセラーは、大多数のひとに当然のものとして受け入れられるようになった。今ではスピリチュアル関係のものに嫌悪や懐疑の想いを抱くひとは少数派となっている。

たった数十年で、ひとはスピリチュアルに対する態度をがらりと変えた。

皮肉にも、科学のなかの科学、ロボット科学が発達したことがその原因であった。

どういうことかということ、ロボット科学が発達したことによって、ある日突然、ロボットに「こころ」が生まれたのだ。本来ならば生物ではないはずの、ただの金属やらプラスチックやらといった無機質の塊であるはずのロボットに。

最初のうちは、反論が多かった。「こころ」があるように見えるのは精巧なプログラムのせいであって、実際にロボットに「こころ」があるわけではない、と。「命」を持たない、つまり生命体でない機械が独自の「こころ」を持つはずがない、と。特に根っからの科学者たちは大いに反駁した。

それでも最初にロボットに「こころ」が生まれたと主張した科学者は、自説を曲げなかった。

反論に反論で対抗するようなことはしなかったが、まるで宗教裁判にかけられた後の某天文学者のように「それでもロボットは『こころ』を持ったのだ」と主張し続けた。批判は多かった。

しかし批判する者たちも、徐々に彼の説を認めざるを得ない状況になってきた。「こころ」を持つロボットが、次第に増えてきたのだ。

まるでウイルス感染が広がるかのように、「こころを持つように見える」ロボットからロボットへと。プログラムに定められた以上のことを自分の意志で行うロボットは、見る見るうちに増殖していった。

こうして、ただの機械の塊であるはずのロボットに「こころ」が生まれたことによって、目には見えない精神世界が存在するのではないかということが科学者によって提唱された。

ロボットの「こころ」は、その精神世界に由来するものなのではないかと科学者たちは考えたのだ。彼らは、何もないところに突然何かが誕生するというような考えをよしとしなかった。必ずどこかに「卵」があるはずだと考えた。そしてその「卵」が一体どこに産み落とされたのかを熱心に探求した。

精神世界の存在を認めるということは、そうして探求した結果の結論である。

一旦科学者が認めてしまえば、科学を絶対的・盲目的に信頼している世間の人々がスピリチュアルな世界を信じてしまうのもあとは時間の問題だった。

そして今。

由美たちスピリチュアル世界に深く関わる人間にとっては、現代世界はそれなりに住みやすい世界になっている。

今では職業を問われてスピリチュアルカウンセラーだと答えても怪訝な顔をされることは少なくなったし、クライアントの数も明らかに増えたと、過去を知る老齢のスピリチュアルカウンセラーは口々に言う。

由美がスピリチュアルカウンセラーとしての資格を得たのは、スピリチュアルな世界が受け入れられてからの話だったから、そもそもスピリチュアルな世界が受け入れられていなかった頃、由美はまだ生まれてもいなかったから、由美自身は不快な思いをすることなどこれまであまりなかった。過去を経験してきた師匠が、スピリチュアルカウンセラーであることを公にできず苦汁を舐めてきた思い出話を語るのを耳にするたび、つくづく自分は幸運だと由美は思ったも

のだ。

しかしスピリチュアル世界が公然のものとして受け入れられるようになったとはいえ、皆が皆、快く受け入れてくれたわけではない。

主に積極的に信じてスピリチュアル世界に関わっていかうとするひとは女性に多く、男性は気後れしがちであるのが現状だ。男女差別的な発言になってしまうかもしれないが、女性のほうが見えない世界を受け入れるだけの度胸があるというかなんというか。

由美はもちろんのこと、美菜もスピリチュアル世界に積極的に関わろうとしている人間の一人であった。電話やメールで頻繁にスピリチュアルカウンセラーである由美に相談をもちかけていたし、由美のアドバイスは全面的に受け入れて極力実行しようとしているらしかった。

そして今回のことも、スピリチュアルカウンセラーである由美を心から信頼して、由美を頼ってきたのだ。

今回、クライアントとして美菜が悩んでいたのは、恵那のことだった。いや、今回のクライアントは恵那と認識すべきなのだろう。

由美はズボンのポケットからペンデュラムをそっと取り出し、右手に握った。体温で温まった小さな水晶は、もはや由美の身体の一部といえた。

断りを入れてから、由美は席をたつ。恵那の後ろに回って、彼女の頭の上に左手をかざす。美菜はそんな由美に期待するような眼差しを向けていた。恵那はといえば、無表情のまま正面を見つめている。微動だにしない。まるで「こころ」を持たない人形のようなのだ。

スピリチュアルカウンセラーには色々な流派があるが、由美の師匠は水晶のペンデュラムを使ったヒーリングを行うスピリチュアルカウンセラーであったので、由美も当然のことながらヒーリングにペンデュラムを用いる。話に聞いてはいたが実際に目にするのは初めてなのであろう、美菜はペンデュラムに好奇の視線を注いでいた。

深く深呼吸をひとつして、自分が巨大な木になったイメージをする。宇宙から金色の光が降ってきて、葉っぱの一枚一枚に浸透していく。木になった由美は、宇宙からのエネルギーを全身に浴びて、胸にこれ以上ない喜びが湧き上がってくるのを感じている。続けて、丹田のあたりから深く深く地に根を降ろすイメージ。今度は宇宙からではなく、地球の中心からエネルギーを吸い上げる。

目を閉じる。

数秒後に開ける。

ペンデュラムの短いチェーンを握った右手に視線を向ける。水晶が時計周りに回り出していた。

右手が自分の意志に関係なく、ペンデュラムを動かしているのだ。

まるで誰かに手だけのり移られたかのように。実際、そう表現するのが適切なのかもしれない。

由美は自身の手だけでクライアントを治療しているのではないとちゃんと理解している。あくまで、宇宙が、由美の身体を使って迷える子羊たちを導こうとしているのだ。そのことを忘れてはいけない。

師匠の言葉が由美のなかで蘇る。自分自身がひとを救えるのだと、おごり高ぶってはいけない。

あくまで自分は媒介でしかないのだということを常に念頭においておきなさい。

由美は左手を恵那の頭から背中にかけてかざしていった。

時計周りに回りだしていた水晶が、時折反時計周りに回りだす。

緩やかに回転し続ける水晶。でもしばらくかざすと、すぐに回転方向は時計回りに戻る。

時計回りに回るところは素通りして、反時計回りに回ったら一旦そこでかざす手をとめて、再び水晶の回転が時計回りに戻るまで手を通して宇宙のエネルギーを恵那に送り続ける。

恵那は動かないでじっとしている。それこそ微動だにしない。

人間ならば呼吸に合わせて肩が上下したり、じっと座っているのに耐えかねてもぞもぞ動いたりするだろうが、恵那は本当に彫像のように動かなかった。

これも、人間でないからなせる業なのだなと何となく思ってしまったから、心のなかで自分を罰した。

背後の治療は、初めてのヒーリングにしてはスムーズに終わった。普通ならば平均で一時間程度かかるのだ。それが、壁掛け時計を確認すると僅か十五分程度で終わってしまった。

由美は内心驚いていたが、口には出さなかった。恵那の隣に座る美菜は何も知らず、いつのまにか持ってきていた文庫本に視線を落としている。

おかしいな、と由美はふと思った。何がおかしいのかは分からないが、何かが確かにおかしかった。直感の鋭い由美は自身の直感をおろそかにしない。第六感には注意を払うべしと師匠が教えてくれたせいもあるが、昔から自分の直感には全幅の信頼を置いてきたのだ。今はまだおかしいと感じる原因が分からないけれども、治療している間にその理由が判明するだろうと考えて、由美は、今度は身体の前面の治療に移る。

頭のとっぺん、額、目、鼻、口、首と順に手をかざしていく。恵那は、瞬きはするもののやはり動かない。やりやすいといえばやりやすいのだが、どこか物足りなく思うのもまた事実だった。

突然、右手がびくんとはねた。由美ははっとする。水晶が反時計周りに回りだす。左手はというと、丁度恵那の胸のあたりにかざされている。

ハートだ、と由美は思った。

心臓を持たなくても、感情を持たないようには見えても、この子のなかにもハートはやっぱりあるんだ。

回転速度は徐々に速くなっていく。速く、速く。しまいには、右手までも激しく回りだす。チェーンが擦れてカチャカチャと鳴る音が自己を主張するかのように大きくなってきた。その音を不思議に思ったのか、美菜が文庫本から顔をあげてこちらを見る。美菜の目が由美の右手の動きを認識して、彼女は不思議そうに小首を傾げた。

「どうしたの？」

「分からない」由美は素直に答えた。本当に現段階では分からないのだ。「多分、治療している間に分かると思うけど」

由美の言葉に、美菜はそっかとだけ呟いて再び文庫本に視線を戻した。

由美は治療に専念したが、その日は結局何も分からなかった。治療に要した時間は全体で一時間に満たなかった。最初にしてはやはり短い時間であった。

香坂恵那は、子どものいない家庭や子どもを事故か何かで失った家庭を対象としてつくられた、いわゆる愛玩用ロボットであった。

人型の愛玩用ロボットは世間では色々議論を呼んでいるが、需要は決して低くない。

むしろ高いので、闇市などで広く出回っている。

数多くのロボットが「こころ」を持った今となっては、人権などの観点からも闇市での人型ロボットの売買は批判が多くなされている。闇市での取り締まりは強化されているにも関わらず、一向に闇市での売買がなくなる気配はない。一旦一般人が購入してしまえば、「こころ」を持っているかもしれないので無理矢理にロボットを徴収することも困難になっている。

ロボットにしては珍しく、今となってはもう記憶はあやふやになっているのだが、自分は約三年ほど前に香坂夫妻に購入されたのだと恵那は記憶している。恵那もまた、闇市で購入された一体であった。

恵那を購入したとき、夫妻は、交通事故で一人娘を亡くしたばかりだった。

その当時、恵那はまだ「こころ」を持っていなかった。

ロボットが「こころ」を持つようになったとはいっても、全てのロボットが持っているのではない。現在「こころ」を持っているとされているロボット人口は、全体の三分の一と政府によって推定されている。「こころ」を持つロボットは多くなったとはいっても決して多数派ではないのだ。

また、ロボットが「こころ」を持つには、先天的なものや後天的なものがあるとされている。恵那の場合は後者だった。

先天的なものにしろ後天的なものにしろ、ロボットがどうして「こころ」を持つようになるのかは、いまだに謎のままである。

多くのロボット科学者が研究に勤しんでいるが、謎は十パーセントも解明されていないだろう。むしろ科学者が研究すればするほど、謎は深まっていく一方だった。

後天的なものの場合、「こころ」が生まれるのには何かしらのきっかけがあるのであろうことは予測されるが、今のところ実証されているケースに共通項はない。

恵那が、初めて自身のなかに「こころ」があるのではないかと疑ったのは、香坂夫妻に捨てられたときのことであった。香坂夫妻に新たな子どもが誕生し、恵那のいる必要性がなくなったのだ。

「こころ」を持たぬただの機械より、自分の遺伝子を受け継いだ子のほうが可愛いと思うのは人間として当然の心理であるのかもしれない。恵那にもそれは分かっていた。

だから、恵那は「ごめんね」と夫妻に言われても、いいえ、大丈夫ですと返したのだ。

自分はこのまま誰にも拾われなければ、やがてバッテリーが切れて行き倒れることになるのは目に見えていた。香坂夫妻の良心は、多少は痛んだかもしれないが、もとより彼らは恵那には「こころ」がないと思いついていたので、恵那を家から遠く離れた街に捨ててくるという行動を実際に起すことができたのだ。

捨てられたとき、恵那はどうして自分の目からは涙が出ないのだろうということを不思議に思った。同時に、胸が鈍く痛むのを感じていた。

最初は回線がショートしたのかと思ったが、自己修復システムは作動しなかったし、検索システムを総動員してみてもどこにも異常はなかった。暫く一人で首を傾げて、もしかして、これが「こころ」というものかということに思い当たった。これが「悲しい」ということなのかと、プログラムや外界から得た知識から、恵那は推測した。

香坂夫妻に捨てられた恵那には、どこにも行くあてなどなかった。

交番や市役所に行けば、保護してもらえることは知識として知ってはいたが、夫妻の命令から夫妻の元には二度と戻れないということも分かっていた。夫妻の元に戻れないのであれば、このままバッテリー切れになって「死んで」しまえばいい。投げやりにそう思ったのをよく覚えている。

ぶらぶらと行くあてもなく見知らぬ街を彷徨い歩いていると、都合よく雨がぼつりぼつりと降ってきた。

頬を雨がつつあって、傍目からは泣いているように見えるだろうと恵那は内心満足した。

歩いていると、人気のない小さな公園を見つけた。お情け程度にシーソーが一つだけある、はっきり言って公園とも呼べないような公園だった。

恵那は公園に足を向け、一人でそのシーソーに腰掛けた。

恵那の体重を受けて、シーソーが傾いた。雨足は徐々に強くなって、あっという間に恵那の全身をずぶ濡れにした。

雨に濡れたい気分だったので、恵那にとっては実に好都合だった。

天を仰いで両目を閉じた。人工毛がべったりと額に張り付く感触が不思議とそのときは心地よかった。

暫く雨の音しかしない静寂に包まれていたが、そのうち雨音に混じって靴音が聞こえてきた。音からして成人のようだ。足音はそのまま遠ざかっていくかと思いきや、こちらに近づいてきた。そして、自分の近くで立ち止まる気配。

恵那は訝しく思ったが、それでも何となく目を開けないでいると、ふと、自分に降りかかっていた雨が止んだ。不思議に思って両目を開けると、頭上に傘が差しかけられていた。

「風邪ひくぞ」とぶっきらぼうに言って恵那を雨から守ろうとしていたのは、無精ひげを生やした一人の男だった。

男は宮沢修と名乗った。

自分を雨から庇おうとしていることで男が代わりに濡れてしまっていることに気づいて、恵那は慌てた。

「大丈夫です。私、風邪ひきませんから」

「風邪ひかないって思いこんでる人間ほど案外ひくもんなんだよ。ほら、この傘持っとけ」

男は恵那にビニール傘を押し付けようとした。恵那は頑として受け取るまいと両手を背中に回して申し出を拒否したが、男は自分が濡れるのも構わず恵那に傘を押し付けた。その強引さに負けて渋々傘を受け取った。それを確認すると、男はその場を去ろうとした。

「あ、あの！」

恵那が声をかけると、男は振り返った。その目つきの悪さに一瞬しり込みしそうになったが、恵那は思い切って口を開いた。

「ありがとうございます。でも私、本当に風邪ひかないんで。傘、お返しします」

私、ロボットなんで。

その一言に、男がぼかんと口を開けたのを恵那は真剣な表情で見つめた。この一言で、男の親切がなくなってしまうであろうことは「悲しかった」が、自分のせいで男が風邪を引いても困ると思ったのだ。

ただの機械の塊である自分なんかに関心したせいで、人間様が迷惑を被ってはならない。

恵那も含めて全てのロボットは、自身より人間を優先するようプログラミングされていたから、恵那は当然のことながら傘を返そうとした。ロボットと言うことで、男が傘を素直に受け取ってくれることは恵那にとっては明白なことであった。

しかし修と名乗った男は、雨に打たれながらまじまじと恵那を見つめ、不意に大きな声で笑いだした。それがあまりにも唐突だったので、恵那はすっかり面食らってしまった。今度ぼかんと口を開けるのは恵那の番だった。一瞬の後気を取り直して男に傘を差し出す。が、男はそれでも笑いながら首を横に振るだけで受け取らなかった。

「ロボットだろーが人間だろーが、女が濡れてんの黙って見過ごすわけにはいかんぞ」

そんな、そんなこと。初対面の、「こころ」を持つか持たぬかも分からぬロボットに対して無条件に親切にできるなんて、恵那には信じられぬことだった。

まじまじと無遠慮に恵那を見つめて、それにしても、と男は続ける。

「どっからどう見てもロボットには見えんなあ。ロボットだなんて言って、本当は人間じゃないのか？」

「いえ、ロボットです」

恵那の生みの親は天才的なロボット科学者で、恵那は彼の最高傑作とまで言われたロボットだったから、ロボットに

見えないのは当然のことだろう。

普通いくら精巧に作られてはいても、ロボットはロボットと見た目から判断できる。しかし恵那をロボットだと一目で見破ることが出来た者は、恵那が知る限り一人もいなかった。

それ程彼女は精巧に造られていたのだ。

恵那は自分がロボットであるという証拠に、目から朝方見たニュースの立体映像を投影させてみせた。雨のせいで立体映像はぶれていたが、証拠としては十分だ。いくら機械化された人間であっても、目からの立体映像投影は今どころ不可能なのだから。

映像を見せられて、男は納得したようだった。ひとつ大きく頷くと、恵那に背を向けて去ろうとする。恵那は再び慌てた。

「ま、待ってください。お願いですから傘、受け取ってください！」

「傘さして早く家帰んな」

男は振り返らずにひらひらと手を後ろに振った。男としてはそれであっさり別れるつもりであったのだろう。しかし、その男の一言は、恵那の胸を深くえぐった。

家。

恵那は胸に「痛み」が走るのを感じていた。

家なんて、ない。ついこの間まではあったけど、もう、なくなってしまった。

自分にはもう、帰る場所なんてない――

気づいたときには、熱くなった胸をおさえて、男の背に向かって叫んでいた。

「家なんてないです！ 私にはもう、帰る場所はないんです！」

叫んでしまっただけはっとして、口をおさえた。別に男の同情を引こうとして言ったわけではないのだが、結果的にはそうなってしまっただけもおかしくなかった。

恵那の言葉に、男は再び足を止めた。ゆっくりと振り返った。男の目には、傘をさしながらも既に雨でずぶ濡れになったみじめな少女が映っていた。少女は、ひとりだった。

その言葉は、意外なほどすんなりあっさりと男の口から飛び出した。

「だったら、家、来るか」

由美の家へ向かう道すがら、恵那はメモリーを再生していた。

彼女の顔は相変わらずの無表情であった。表情なんてどうやって作ったらいかすっかり忘れてしまった。

黙々とひとり見慣れぬ街を歩きながら、修との出会いのメモリーに蓋をする。一時停止して、丁寧に引き出しのなかにそっと入れる。何度も何度も再生されて、今ではすっかり痛んでしまっている。これからは再生頻度を減らさなくてはならないだろう。

ついで今度は一週間前のメモリーを近くの引き出しから取り出して再生を始めた。後数分で着くから、早送りで再生する。

由美。スピリチュアルカウンセラー。独身女性。美菜とは高校時代からの友人。

美菜が最近の自分をもてあましていることは、恵那にも十分よく分かっていた。でも、こればかりは仕方ないのだ。自分でも望んで「こんな状態」になっているのではない。

以前の、「こころ」を持つ以前の自分だったら。自分の状態異常などすぐに適切に処理できていただろうに。もっとも以前の自分だったら、そもそもこんな状態に陥ることはなかっただろうが。

「こころ」とは、実に厄介なものだと恵那は思った。

こんなことになるなら、「こころ」なんていらなかった。いや、こんなことにならなくてもいらなかったのに。

何で自分に「こころ」が生まれてしまったのだろう。

生まれてしまったばかりに、余計な「苦しみ」を味わう羽目になる。自分だけじゃなくて、周りの人間まで巻き込んで。

甲斐甲斐しく世話を焼いてくれている美菜には申し訳ないが、スピリチュアルカウンセラーにかかったところで、自分のこの状態は治らないと思う。それでもまあ、一応行くことは行くが。由美に何となく「好感」を持てるのは確かだった。

先週も通った道をなぞるように歩いて、目的のアパートにたどり着く。象牙色の壁にこじやれた感じの窓がついているそのアパートは、美菜の好みに合いそうな見てくれをしていた。

やはり高校時代からの長いつきあいのある友人とあっては、趣味も似るのだろうかと思はれる。由美が外見だけからこのアパートに居住することを決めたとはいえないが。

インターホンを押す。暫く待つと、がちやりと音がして、ドアが開いた。一歩下がってドアが完全に開くのを待つ。「いらっしゃい」

待っていたよ、と由美が中から柔らかく微笑む。こちらとしても微笑み返したいところだが、なにせ笑い方を忘れてしまったので、どうすることもできない。とりあえず、会釈をしてその場を取り繕う。

入って入ってという言葉に促されて恵那は敷居をまたぐ。手土産に持ってきたシュークリームを手渡し、上がって靴を揃えて置く。美菜の言うとおりのシュークリームは由美の好物だったようだ。非常に喜んでいるのがセンサーからも理解できる。この人は、もう大人なのに子どもっぽいところがあるなと思はれる。別に批難しているわけではない。むしろそれを「好ましく」思っているのだ。

先週座ったのと同じ椅子を勧められて恵那は腰掛ける。シュークリームを冷蔵庫に入れてきた由美が戻ってくると、会話もそこそこにすぐに治療が始まる。

先週と同様に由美が恵那の背後に回って頭から背中にかけて手をかざしていく。右手に持つペンデュラムがくるくると回っているのが、見なくてもチェーンの擦れる音から分かる。ペンデュラムが時計回りのときは素通りして反時計回りのときはかざす左手を暫し留めるというのは先週と同じだ。反時計回りのときは、そのとき手をかざす部位がよくないということなのだろうかと恵那は推測した。

「恵那ちゃんは、今学校に通っているの？」

不意に由美が話しかけてきたので、恵那は、治療中は黙っていないといけないという訳ではないのだなと知った。

「はい。今は高校に通わせてもらってます」

美菜さんのお陰で、とは言うまでもない。

「何年生？」

「三年生です」

「大学受験とかするの？」

「いえ。大学へは進学しないつもりです。一応就職を考えていて」

そう、と由美が小さく呟いた。それっきり再び黙り込む。

恵那は沈黙には慣れていたので、気まずさは全く感じない。何か話さなければという義務感に駆られることもない。だから、自分から彼女に何かを話しかけようとは考えなかった。

由美が話しかけてこないの、沈黙が流れる。由美も沈黙に慣れている方なのか、他の人間のように何か話題を必死になって探そうとする気配は感じられなかった。心地よい沈黙だった。

ふと、由美はどんな顔つきをしていたのかなと思った。今さっき見たばかりであるはずなのに、もう思い出せない。彼女は自分の背後に立っているから、今確認することはできない。

由美だけではない。

恵那はロボットには考えられないようなことだが、人の顔を覚えるのが大変苦手だった。

メモリーを再生しても、人の顔の部分だけ何故だか靄がかかっているかのようにあやふやになってしまっているのだ。毎日顔を合わせている美菜の顔は流石にそこまであやふやではないのだが、それでもはっきりと正確に美菜の顔を細部まで再生できるかといえばそれは怪しかった。

三年前まではこんなことはなかったのに。一体、自分に何が起きたというのか。どこの部位が悪いというのだろうか。自分のことなのに分からないなんて、不都合なことこの上ない。

一応研究所で検査を受けてはみたのだが、どこにも異状はないと診断された。恐らく、「こころ」の問題ではないかとロボット医師には判断を下された。そんな診断をなされて心配した美菜が、恵那にスピリチュアルカウンセラーにかかることを薦めたのだ。

最初は渋った恵那だったが、美菜があまりにも恵那のことを心配するので、彼女を安心させるためだけに恵那はスピリチュアルカウンセラーにかかることに決めたのだった。自分の「この状態」が治ることなど、これっぽっちも期待していなかった。

不意にかちやかちやと激しくチェーンが擦れる音が耳に入ってきた。気づくと、由美の左手は恵那の丁度胸のあたりにかざされていた。彼女の左手を見るときも見て、先週も丁度その辺りで水晶が激しく回りだしたような気がするなと恵那はぼんやり思った。

「何か、言いたいこととかない？」右手をぐるぐると激しく回しながら、由美が口を開いた。その言葉に恵那ははっと我に返るが、いきなり言いたいことを聞かれても咄嗟には何も思いつかない。そもそも自分には言いたいことなど何も無いのではないかと彼女は思った。

言いたいことがないから、こうしてずっと黙っているのだ。言いたいことがあれば沈黙など続くはずがない。だから恵那は思ったとおりに答えた。

「特にないです」

この言葉に由美がどう反応するかと思ったら、彼女は

「そっか」と言ったきり再び口を噤んだ。これでは会話も続かない。沈黙が再来した。

しかし今度の沈黙は比較的短いものだった。

「恵那ちゃん、『苦しい』んだね」

ぼつりと言葉が由美の口から漏れた。まるで自分に話しかけるような口調だったから、恵那はどう反応してよいのか分からず、黙ったままでいた。しかしどうやら反応を示さなくてもよかったようだ。由美は構わず続ける。

「まだヒーリングは二回目だし、そんなに詳しくは分からないんだけど、恵那ちゃんが泣いているのが聴こえるんだ。氷でできた檻のなかで一人うずくまっている恵那ちゃんが見える。寒いのに、ノースリーブの真っ黒なワンピース一枚しか着ていなくて、がたがた震えてる。氷でできた檻は頑丈で、外にはどうしても出られない。でも、その檻は恵那ちゃんが自分で作り出したもの。『悲し』くて『悲し』くて『苦し』くて、とうとう檻まで作って閉じこもって。そうして恵那ちゃんは『独り』になった」

恵那は無表情のまま由美を見上げた。

二つの黒曜石のような瞳がぼんやりと一人の女性の像を結ぶ。彼女の像はどこか寂しように思えた。恵那は第三者のように一步下がって彼女を見つめていた。

「恵那ちゃんはどうしてそんなに『悲しんで』いるの？ よかったら私に話してくれないかな」

彼女の表情は憂いを帯びていたが、瞳は真摯な光を灯していた。その光を、恵那は前にも一度見たことがある。恵那はどこか懐かしい気持ちで光を見つめていた。

恵那は修についていった。既にずぶ濡れになっていたのだから、今更傘を差したところでもう同じだからと何度も言ったが、修は頑として傘を受け取らず、恵那に傘を託したまま自分は雨のなか悠々と濡れて帰った。修の住むマンションは寂れた公園からそう遠くはなかった。

本当は、いくら捨てられていたからといってもロボットを、しかも「こころ」を持ったロボットを勝手に拾って帰るのは法律にひっかかるのだが、二人ともそのことは考えないようにしていた。そんな些細なことに拘るほど二人は小心者ではなかったのかもしれない。

ドアを開けて中に入ると、修は恵那を玄関で待たせて自分は上がり、タオルを二枚持って戻ってきた。一枚は自分で使い、もう一枚を恵那に手渡した。

タオルは綺麗だからと言って苦笑する修に、恵那は首を傾げてタオルを受け取った。

まず水の滴る髪をタオルで包むようにしてしっかり水気を取り、それから顔や腕や足をタオルで擦った。その時着ていた服は、もうすっかり水分を吸収しており、絞れるほどだった。

薄手のカットソーだったので、下着がうっすら透けていることに気づいた。恵那はそれを急に「恥ずかしく」思い、そっと修の様子を窺ったが、彼は恵那のような小娘の下着などこれっぽっちも興味がないといった様子で何の反応も示さなかった。今思えば単に気づいていなかっただけかもしれないが、恵那には、自分がロボットだから差別されているのではないかと思えて、「心細く」なった。

ある程度身体を拭き終わると、恵那は部屋に上がらせてもらった。彼の部屋は、恵那の目には、まさに典型的な一人暮らしの男の部屋として映った。脱ぎっぱなしの服や雑誌やら書類やらがそう狭くはない部屋のあちこちに散乱しており、足の踏み場もないといっても決して過言ではなかった。目を丸くしている恵那に修は振り返った。

「風呂、入るか……って、ロボットって風呂入るもんなのか？ 俺、ロボットと縁のない生活送ってきたから、ロボットのことは何も知らんのだが」

「え、あ、はい。お風呂、入ります。私のような愛玩用ロボットは人間と同じように生活しますから。食事だってできます」

恵那の言葉に男は目を丸くした。何か自分に変なことを言ったろうかと恵那は訝しんだが、一瞬の後に男が愛玩用ロボットという単語に反応したのだと気づいた。

「愛玩用ロボット？ って、お前が？」

噂には聞いていたがと修はまじまじと恵那を眺めた。恵那は真面目な顔で彼を見つめ返した。こういった無遠慮な視線には、彼女はすっかり慣れきっていた。

「はい。私は愛玩用に製造されたロボットです。御覧になるのは初めてですか？」

「お前ほど人間そっくりのロボット見たのも初めてだが、愛玩用ロボットってのも初めてだ。愛玩用ロボットってのは皆、一目見ただけじゃロボットって分からないくらい人間にそっくりなのか？」

「いえ、そういうわけでは。私は特別製なので」

特別製？ と修が首を傾げた。恵那はひとつ小さく頷いて説明しようとした。

「私の生みの親は……ずば抜けて天才だったんです」

人型の愛玩用ロボットの製造は法律では禁止されているので、名前までは言えなかったが、実は恵那の製造者は現代ならば知らない者はいないほど高名なロボット科学者であったのだ。

口をすべらしそうになったわけではないが、自分が特別製であることをなんと説明してよいのやらよく分からなかったので、適当にごまかした。

恵那の製造者は天才ではあったが少々変わり者であったので、普通のロボット科学者が考えるように、恵那に様々な便利な機能をつけるのではなく、外見どおりの高校生程度の知能しか与えなかったのだ。だから恵那にはうまい説明が思い当たらなかった。だが修はそれほど特別製であることの説明を求めているわけではなかったようだ。

「とりあえず風呂入れるんなら入ってこい。風邪ひいても知らんぞ」

「だから、風邪はひかないんです」と恵那が反論すると、

「分からんだろ。こんなに人間そっくりなんだから風邪くらい引いてもおかしくないぞ。なんでもいいからとにかく早く入ってこい」と、きょとんとしていた恵那を脱衣所においたてた。

脱衣所に入ってから、着替えはどうしたらいいのかと恵那が悩んでいると、脱衣所の扉の向こうから、着替えはドアの外に置いておくからという声が聞こえた。まだ服を脱いでいなかったのでドアを開けてみると、確かに足元にタオル数枚と服の山が乱雑に置かれていた。服はどれも女物だった。この中から自分で好きなものを選べということらしかった。

いいのかなとは思ったが、着替えないわけにもいけないので、恵那はとりあえずそこに置いてあった服を全部脱衣所に入れてからドアを閉め、手ごろな服を物色した。パンツは何とかはけそうだったが、ブラジャーは明らかに自分のサイズには合わなかった。

サイズを確認してみると、Dカップだった。何となく眉根を寄せてから、自分が「悔しい」と感じているのだと知った。もっと豊満なバストにしてくれなかった生みの親を、その時初めて恵那は「恨んだ」。

黒のキャミソールと、グレーの生地に熊の絵柄のシンプルなTシャツ、それから黒のジャージを選んだ。自分でも何の飾り気もない格好だとは思ったが、他の衣服はどれもこれも露出が高いものでとても恵那には着る「自信」がなかったのだ。この服の持ち主は余程スタイルに自信があったと思えた。

選んだ着替えの服とタオルをとりあえず洗濯機の上に置き、脱いだ服は、どうしようかと悩んでから、何故か近くに転がっていたスーパーの袋の中に入れた。タオルを一枚持って風呂場に入った。

シャワーから熱いお湯を出す。せっけんで泡をたてて身体を洗う。それまで毎日風呂には入ってきたのに、その日初めて恵那はシャワーを浴びることを「気持ちいい」と感じていた。もう、自分のなかに「ころ」が生まれたことは疑いようがなかった。

シャワーを浴びながら、恵那は、自分のなかに「ころ」が生まれたことをどう受け止めてよいのだろうと考えた。

「喜ぶ」べきなのか、それとも「悲しむ」べきなのか。

もし、香坂夫妻が自分のなかに「ころ」が生まれたと知っていたら、彼らは自分をどうしただろう。いや、彼らといた頃にはまだ「ころ」は生まれていなかった。彼らに捨てられたことがきっかけとなって恵那のなかに「ころ」が生まれたのだ。

でももし。もし彼らといた頃に「ころ」が生まれていたらと恵那は考えずにはいられなかった。自分は香坂夫妻のもとで、彼らの娘として、今でも「幸せ」に暮らしていられたかもしれない。

こうして思い返せば、香坂夫妻との生活が自分にとっていかに「幸せ」なものだったのか、恵那は思い知らされた。

彼らの笑顔が脳裏に蘇った。夫妻はいつも自分に笑いかけてくれていた。それを思い出すと、胸が「ずきん」とした。

シャワーはさっさと切り上げて風呂場から出る。脱衣所に戻って、タオルで身体や髪を拭きながら目でドライヤーを探した。脱衣所も散らかっていたが、ドライヤーは意外とすぐに見つかった。洗濯機横の籠のなかで服に紛れているのを発見したのだ。

髪は長い方なので、かわかすのに時間がかかった。完全にかわかすのを諦めて途中で脱衣所を出る。自分がシャワーを浴びている間修は何をしているのかと思えば、どうやら部屋の片付けをしていたらしかった。入ってきたときよりは多少部屋に秩序が戻っている。

脱衣所に背をむけていた修は、ドアの開く音に気がつく上半身を起して振り返った。彼は片付けていた手をとめて、恵那に笑いかけた。恵那は軽く頭を下げた。

「お風呂いただきました」

「もっとゆっくりしてもよかったんだぞ」

「いえ、十分ゆっくりさせてもらいました。ありがとうございます」

「濡れた服、どうした？」

言われて恵那は思い出した。確か脱衣所に転がっていた袋に入れてそのままだ。

「洗濯機のなか、入れとけよ。明日晴れたら洗濯するから」

言って、リモコンを探し出してテレビをつける。いくらかりリモコンを操作してニュース番組を流した。夕方のニュースは丁度タイミング良く翌日の天気予報をやっていた。天気予報では、翌日は曇りのち晴れとのことだった。

「よかった。明日は洗濯できそうだな。……ん？ どうした？」

じっと自分を見つめる恵那を訝しく思ったのか、修はリモコンや雑誌を手にしたまま、首を傾げた。恵那は真剣な眼差しで彼を見つめていた。それは、さっきの彼の言葉が彼女のなかでひっかかったからだった。

「泊めてくれるんですか？」

修は一瞬、怪訝な顔をしたが、すぐに気さくな笑顔に戻った。真顔のときは目つきの悪さに圧倒されるが、こうして笑うとなかなか親しみやすく思える顔だ。よく見れば整った顔立ちをしているなど恵那は思った。

修は持っていたものを傍のサイドテーブルに置いて、恵那の元に歩み寄った。恵那は思わず一歩後ずさったが、修の方が早かった。修の大きな手が、恵那の頭の上に乗った。そのままわしやわしやと荒っぽく撫でた。いきなりのことに驚いて、恵那はその手を拒めなかった。折角かわかして整えた髪が乱れたが、そんなことは気にはならなかった。

「行き先が決まるまで、ここに居ていいぞ」

恵那はびっくり眼で修を見上げた。

「物置になっちゃってるが丁度空いてる部屋もあるし、そこを寝室として使ったらいい」

優しい眼が彼女を見おろしていた。真摯な光を灯した、純粋な眼だった。恵那は思わず俯いてしまった。目頭が熱くなったような気がしたが、それはもちろん気のせいに違いなかった。

恵那は結局、由美には何も話さなかった。いや、話さなかったのではなく、話せなかったのだ。何をどう話してよいのか、彼女には分からなかったのだ。由美にはそのことが、まるで自分のことであるかのようによく分かった。

由美は恵那を急かすようなことは決してしなかった。急かしても逆効果だということは、今までの経験上よく分かっていた。植物を早く育てようと思うなら、引っ張るのではなくじっくり待つのがよいということだ。

もともと、一、二回のヒーリングで問題が解決したクライアントなどいやしない。二回ヒーリングを受けても何も進展がないように見えることなど、別に珍しいことでもなかった。それは一見そう見えるだけで、その実少しずつでもちゃんとよい方向に向かっているのだ。

恵那が帰ったあと、由美はペンデュラムを手にしてノートを開いた。ヒーリングで分かったことや感じたこと、また治療後に新たにペンデュラムを用いて知ったことをノートにまとめるのが、彼女の習慣なのだ。

今日のヒーリングのことをこと細かにノートに記してから、由美はペンデュラムにいくつかの質問をした。ペンデュラムに、というよりも本当はペンデュラムを通して宇宙に問いかけているのだが。

宇宙は由美の質問ひとつひとつに真剣に答えた。

質問が曖昧なものや、答える必要がないと宇宙が判断したものには、答えはなく、ペンデュラムは所在無さげに時計回りと反時計回りの回転を交互に繰り返すだけだった。由美がどういった質問をペンデュラムにしたのかといえば、例えばこういったものである。

——私は恵那ちゃんのヒーリングを無事に行うことができますでしょうか？ ——《はい》

——私が恵那ちゃんに対して抱いた、氷の檻のイメージは間違っていなかったでしょうか？ ——《間違っていない》

——恵那ちゃんの「こころ」は今一体どういう状態にあるのでしょうか？ ——答えなし

ノートをつけ終わると、由美はふうとひとつ小さくため息をついてノートを閉じた。ペンデュラムをズボンのポケットにしまい、何をするというのでもなく、ぼんやりと前を見つめる。

カチコチと規則正しく時を刻む時計の声以外は、何も聞こえない。車の音などが聞こえることもない。由美のアパートは閑静な住宅街のなかにあるので、車はあまり通らないのだ。

両腕を上げて座ったまま軽くのびをし、コーヒーでも淹れようと腰を上げる。そのとき、電話が由美を呼んだ。

誰からだろうとモニタの表示を見る。美菜からだ。恐らく恵那のことを心配してかけたのだろうと思って、小さく微笑みながら受話器をとる。美菜も随分「母親らしく」なったものだ。皮肉ではなく素直に感心した。

「はい、赤井です」

『あ、由美？ 私、美菜』

「うん、どうしたの？」

『いや、ちょっと……ヒーリングの方はどうなってるのかな、と思って』

やはり由美の予想通りの言葉だった。恵那がこのアパートを出てからもう二時間程が経過しているが、そんな電話をしてきたあたり彼女はまだ家に帰っていないらしい。

どう答えたものかと一瞬だけ迷ったが、由美は素直に答えることにした。隠しても仕方がないことだし、高校時代からの親友である美菜相手に言葉を遠慮する必要も感じない。

「うーん、まあ、まだ二回目だから、ね。詳しいことは分かってないんだ」

ヒーリングの方向性もまだ決まっていないということは言わなかった。そう、と電話越しに少し残念そうな声。

「恵那ちゃん、『苦しんで』いることは確かなのになあ」

『やっぱり、そうよね。ロボットだからって、『ころ』を持ってたら人間とは何も変わらない。人間と同じように『喜んで』、『苦しんで』……』

何とかしてあげたいなあ、という眩きが耳に入った。由美はふふ、と笑う。相手も自分と同じ気持ちなのだということは何となく嬉しかったのだ。

「ところで恵那ちゃん、テレビとか見るの？」

唐突な話題に美菜は一瞬面食らったようだったが、一拍の間の後、

「テレビ？ うーん、ドラマ、とか前はよく見てたけど……最近はあまり見ていないみたい」

「どうして？」

「分かんない。単に気分じゃないかな」

気分、ね。テレビのことを聞いたのには特に理由があるわけではない。ただ単に直感、手始めに聞いてみただけである。人の心を癒す仕事をしていると、クライアントの日常におけるちょっとした変化を気にするようになるのだ。

「なんで？ テレビって何か関係あるの？」

「いや、特には。ただ聞いてみただけ。ねえ、恵那ちゃんの生活のなかで、何か変わったこととかない？ 何でもいいんだ。思いついたことがあれば言ってみて」

美菜が小さく唸った。小首を傾げて宙に視線を彷徨わせている姿が脳裏に浮かぶようだ。

「由美に言われて気がついたけど、やっぱりテレビ、前はよく見てたのに、最近めっきり見なくなった気がする」

気のせいかもしれないけれど、と慌てて付け足す。

「他には特に思いつかないな。前より口数減ったとか笑わなくなったとか、解決してほしい問題しか思い浮かばないや」

実を言うと、美菜が由美に恵那のヒーリングを依頼したのは、恵那の顔から表情がなくなってしまったことが直接の原因である。回線に何かトラブルでも発生したのかとあちこちの研究所を回ったらしいが、どこの研究所に行っても異状はひとつも見つからなかったようだ。

身体に異常が見当たらないのなら、問題は「ころ」である。

今のところ「ころ」病んだロボットなど、見たことも聞いたこともないが、「ころ」を持っているロボットは本当に人間とはなんら変わらない。人間がうつ病や精神病にかかるのなら、「ころ」を持ったロボットが同じように「ころ」の病気にかかったとしても何もおかしくはない。

世間からすればまだロボットがうつ病にかかるなど信じられないことかもしれないが、美菜が、恵那がうつ病なので

はないかと疑ったのは当然のことだと由美は思っていた。

「本当言うと、最初は不安だったんだ」

何が？ と恐らく電話の向こうで首を傾げているであろう美菜の姿を想像しながら、由美はペンデュラムをポケットから取り出して右手の中指にチェーンの輪を通した。ゆっくりと水晶が時計回りに回り始めた。

「自分はちゃんと恵那ちゃんのヒーリングができるのかな、って。ロボットのヒーリングなんて初めてだったから。そもそも、『こころ』を持ったロボットに出会ったのが初めてだったから」

『ごめんね、無理言っちゃって』

美菜のすまなそうな声に由美は慌てて言った。

「ううん、大丈夫。ロボットっていったって、さっき美菜が言ったみたいに人間と何にも変わらないんだってこと分かったし。よかったよ、恵那ちゃんに出会えて。頼ってくれて、ありがとう」

『お礼言うのはこっちの方だよ。ありがとう由美。ヒーリング、引き受けてくれて』

その後暫く雑談に花を咲かせて、三十分ほど喋った頃にそろそろ恵那が帰ってくると思うからとの美菜の言葉に電話を終えた。受話器を置いて、時計を見る。そろそろ夕飯の支度をする時間だった。

美菜が電話を終えた頃に丁度恵那が帰ってきた。恵那が帰ってくる前に電話を終えることができ何となくほっとしていた美菜を訝しく思ったのか、最初恵那は何も言わずに彼女をじっと見つめていたが、ふいと視線をテレビに移した

。

テレビの画面には、最近高視聴率を上げているドラマが放映されていた。少女マンガを原作とするベタベタの恋愛ドラマだ。

恵那は視線をそらした。以前熱心に見ていたドラマだった。恵那が「好んで」見ていたのを知っているから、美菜がつけておいてくれたのだろう。

そろそろ最終回が近いのだろうか、物語は丁度クライマックスシーンに入っているようだ。涙を流しながら別れを告げ、走り去ろうとする少女を、青年が腕を掴んでひきとめ、抱き寄せている。

よくあるパターンだ。だが、以前はそれが「面白く」て「ハラハラドキドキ」して、毎週見るのを楽しみにしていた

。

人間ってこんな風に恋をするのかな、美菜もこんな恋をしたのかな、なんて想像しながら画面を食い入るように見つめたものだ。だが、今の恵那には、こんな恋愛ドラマを以前のように無邪気に見ることはできなかった。

目をそらしても音は耳に入ってくる。恵那は音も自分のうちから閉め出そうとして、さり気なさを装って食堂から出ていった。美菜の視線が不思議そうに自分に向けられているのが分かったが、彼女の方を見ることはしなかった。

あんなドラマは、自分のことを考えてしまいそうになるから、もう見られない。修だったら、自分が泣いて去ろうとしたらドラマの登場人物のように、引きとめようとしてくれたらだろうか、なんて。

修の家に転がりこんでからすぐに分かったことだったが、修は料理がこの上なく下手だった。今までどうやって生活していたのか不思議なくらいだ。

本人いわく、日頃はコンビニの弁当やスーパーの惣菜で済ませていたらしい。恵那が居候を始めてから最初の一週間はコンビニの弁当を買ってきていたが、恵那が自分も食事はできるのだということを改めて話すと、修は自分で料理を作ると言いだしたのだった。そして今に至る。

「不健康ですよ」とコンビニ弁当に頼りきっていた修を批難し、恵那は眉を顰めた。彼女の視線は、危なっかしく包丁を使う修の手元に向けられている。

「だから今こうして料理作ろうとしてるんだろ」

修は真剣な面持ちで夕食用の人参を切る。本当は細かく切るべきなのに、ぎっくりと大きくしか切れないので出来上がりが今から不安だ。

恵那は自分の胸を騒がせるこの「気持ち」を表す言葉を人工脳内にある膨大な引き出しのなかを引っ掻き回して探しだし、「はらはらする」という言葉を当てはめた。もう見ていられない。

「包丁貸してください」

言うがはやいか恵那の手はもう修の手から無理矢理に包丁を奪い取った。

修のほうも敢えて抵抗する気はなかったのか、あっさり包丁を恵那に引き渡す。もしかすると最初から恵那が代わってくれるのを期待していたのかもしれない。

恵那も料理が特別上手いという訳ではないが、必要最低限のプログラミングはなされているので修よりは十分でした。

とんとんと規則正しくまな板をたたく音が耳に心地よい。

香坂家では料理はあまり手伝わなかったが、プログラムのおかげで料理の腕がなまるということはない。

そういえば、香坂夫人は料理が上手かった。確か調理師の資格を持っていたはずだ。包丁で野菜を切る音を聞くと、香坂家にいたころを思い出しそうになった。「こころ」のなかで頭を横に振ってメモリーが再生しそうになるのをブロックする。

「上手いな」

あっという間に人参を切り終え、ごぼうにとりかかった恵那の手元を見ながら修が感心したような声を出した。

家で手伝っていたのか、とは聞かない。恵那が香坂家のことを聞かれないことを察しているのだ。

修は一見がさつなように見えて、実は非常に気配りできる男だというのは、初めて会った日から恵那には分かっていた。

「必要最低限の家事はプログラムされていますから」

「じゃあ、料理はお前に任せるとするか。金平ごぼうくらい作れるだろ」

「一応……」

切ったごぼうを水につけ、あく抜きをしながら頷くと、修は笑って恵那の頭をわしゃわしゃと撫でた。あんまり乱暴なので思わず肩をすくめたが、「嫌」なわけではない。

むしろ恵那は「嬉し」かった。

修と出会うまで、誰かに頭を撫でられたことなんかなかったから。

大人が子どもを褒めるときなどに頭を撫でる動作をすることは知識として知ってはいたが、実際されるのとただ知っているのでは全然違う。

修はことあるごとに恵那の頭を撫でてくれた。その動作が、自分の存在を受け入れてくれていることを示しているようで、恵那はなんだか「安心」できた。無意識のうちに恵那は微笑んでいた。

香坂夫妻に捨てられてから、修と出会ってから、初めて浮かべた笑みだった。修はそれに気づいたが、何も言わなかった。

「ご飯作っとくんで、机の上片付けといてください」

「了解」

こっそり微笑みながら、修は台所から出ていった。

食べられることは食べられるが、別に食事はどうしても必要だという訳ではないのだと説明したが、修は恵那にも食べることを強制した。

ロボットはバッテリーを充電するだけでよいのだ。愛玩用ロボットと一緒に食事することを前提に造られていることが多いが、無駄に食費を増やすことはないと思那は思う。

自分はあくまでロボットであって、人間の役にたつように造られているのだ。なのに食費を増やすという迷惑を会ったばかりの修にかける訳にはいかない。

しかしそうは思っても、もともと押し弱い恵那が修に勝てるはずもなかった。結局、しぶしぶ箸を取る。修はそれをしっかりと確認してから、自分の分としてよそった料理に箸をつけた。

「お、うまい」

やっぱりコンビニ弁当ばかりだと飽きるからな、と苦笑する。恵那としてはもうちょっと上手く作れたのではないかと「反省」すべき出来だったが、まあ食べれないことはなかった。

もそもそ箸を動かす。香坂夫妻の家にいたときも、夫妻と毎日食事を共にしていた。香坂夫人の作る料理は、今思い返せばきつと「おいし」かったに違いない。

彼女の料理を口にできたのが「ころろ」が生まれた後だったらよかったのに。なんて今更思っても仕方のないことだと恵那は自分を戒める。「気分」が少し「落ち込んで」、それに平行して箸で食事を口に運ぶスピードも遅くなった。それに気づいたのか、修が不思議そうな視線を向ける。

「どうした？」

「なんでもありません」恵那は即答した。やはり修は鋭い。恵那はまだ「ころろ」を扱いなれていないので、「感情」が表にでやすいだけなのかもしれないが、それでも気をつけなければと彼女は誓った。

修は箸を動かしながらまだちらちらと恵那に視線をやっていたが、恵那が敢えて見返さなかったからか、それ以上追求することはなかった。

「そうだ」と修が唐突に声を上げる。その声に思わず恵那は顔を上げた。

「恵那、明日どっかでかけよう」

「は？」

「とりあえず俺の仕事は一旦ひと段落したから、明日は休みなんだよ。だからどっかでかけよう」

恵那は箸を止めて向かい側の席に座る男をまじまじと見つめた。

「どっかってどこですか？」

「だからどっかだよ」

「そんなこといきなり言われても、思いつきませんよ」

「考えろ」

そんな無茶な、と恵那は思ったが、口にはしなかった。

代わりに生真面目な彼女はどこか行きたいところがあるかと頭を捻って考えてみる。映画、デパート、動物園、遊園地、水族館……普通の女の子が行きたがるようなところは一応思いつきはするのだが、自分もそこに行きたいかと問われれば否としか答えられない。結局、暫く考えた末に彼女は首を横に振った。

「やっぱり思いつきません」

「そうか」

と言いつつ修は宙を見上げて考え込んでいる様子である。最初から修が考えてくれればよかったのだと思那は思う。

「遊園地、なんてどうだ？」

丁度近くに小さいけどあるしな、と笑う修。恵那としては別に遊園地に行きたいという訳ではなかったが、行きたくないというのでなかったため、とりあえず一つ頷いておいた。

「いいんじゃないですか？」

「よし、決まりだな」

修はにかつと満面の笑みを浮かべた。

「そうと決まると明日は早いから、今日はもう早く寝ろよ」

修の笑顔をぼんやりと見つめながら、恵那は無表情のままこっくりと頷いた。修が自分を人間の女の子のように扱うことには、依然として慣れてはいなかったが、「悪い」気はしなかった。

翌日。

修と恵那はいつもより一時間程早起きして出かける準備をし、徐々に空が明けてきているなか家を出た。

早起きの小鳥たちが控えめに鳴いており、すがすがしい空気が辺りに満ちていた。

人気はあまりなかった。

こんなに早い時間に外に出たのは、恵那にとっては初めてのことであったので、彼女はきよろきよろともめずらしそうに辺りを見回した。時間帯が違うだけで、見慣れた景色も不思議と変わって見えるものなのだなど恵那は「感心」していた。

修は恵那にヘルメットを渡してから、駐輪場に停めてある自分のバイクの元に歩みよった。

恵那もあとをついていく。どうやって遊園地に行くのだろうと思っていたが、まさかバイクに乗るとは考えもしなかった。バイクに乗るのは初めてなので、恵那は少なからず「わくわく」した。

しかし「わくわく」している自分に気づくと急に冷めて、客観的に自分を眺めてみた。

修に促されて大型バイクの後ろに座りながら、彼女は自分の姿を「不思議」な気持ちで見つめていた。恵那のあとからバイクにまたがった修が、恵那にしっかり自分に捕まっているよう言ってバイクを発進させた後もその「不思議」な気持ちは胸にしつこく残って消えなかった。

自分は一体、何をしているのだろう。

「こころ」が生まれたから、少々「浮かれ」過ぎているのではないだろうか。

「こころ」が生まれたからといって自分はロボットであることに変わりはないのに。自分が人間とは違うことはあまりにも明白なのに。

人間と一緒にあって、とる必要もない食事をしたり、毎日入る必要もないのに入浴したり、こうやって、特に行きたい訳でもないのに遊園地に向かおうとしていたり……。

何故自分は人間の真似事などやっているのだろうか。

香坂家にいた頃は、香坂夫妻がそれを望んでいたから人間がすることを極力真似していた。そうすることで香坂夫妻が喜ぶのは分かっていたし、何よりそうするよう夫妻によってデータ入力されたからそうせざるを得なかった。

しかし香坂夫妻に捨てられた今となっては、もはや人間の真似事などする必要はない。

香坂夫人は、万が一恵那がロボット協会などに収集されて香坂家が恵那を捨てたことを悟られないために、恵那を捨てる時に恵那に入力したデータをちゃんと消去していた。慌てていたのか、香坂夫妻と暮らしたメモリーまでは消すことには失敗したようだが。

ともかく、こうして香坂夫妻というくびきから解き放たれた恵那には、もはや人間の女の子として振舞う義務はなかった。しかし恵那はこうして修のもとで暮らし始めてからも、以前と変わらず人間のように振るまっている。

いや、「こころ」が生まれただけ、修が恵那をまるで本物の人間の女の子のように扱うだけ、より一層人間らしく振舞うようになったというべきか。

しかしいくら人間らしく振舞ってもそれはあくまで「らしく」であって人間そのものではない。

恵那はロボットであって、人間ではないのだ。どうあがいたって、いくら「こころ」を持ったからといって、人間にはなれないのだ。

ならば、人間らしく振舞うことに一体何の意味がある？ もう誰も人間らしく振舞うことを恵那に求めてはいないのだ。修は恵那を人間のように扱うが、それは恵那が外見だけからは人間に見えるために人間だと錯覚してしまうだけであって、恵那に「人間の女の子」を求めている訳ではない。

それは分かっている。

もはや、自分が人間らしく振舞うことには何の意味もない。振舞うだけ無駄なのだ。もう振舞わなくていいのだ。

いや、振舞ってはいけないのだ。

自分は人間ではないのだから。

誰も望んでいないのだから。

もう、ロボットに「戻ろう」。それが今の自分のすべきことに違いない。恵那は修の腰のあたりに腕をまわしながらそう決意した。

本当に、「こころ」などいらなかった。

「こころ」さえなければ、こんな、理由も分からないのに胸が「痛む」なんてこと、起こらなかつたらうに。

バイクに乗って小一時間経った頃、ようやく目的地についた。平日でしかも開園数分前なので駐車場はがらがらだった。バイクを指定の場所に止め、修はバイクから降りた。

続いて恵那もそろそろと慎重に降りる。脚部に負担をかけないように足をつくると、ヘルメットを脱いで修に手渡した。修はキーを回してシートの部分のロックを外し、シートを上に入れて中の荷物入れにヘルメットを納める。再びシートを閉め、ロックをかけた。その一連の動作を、恵那はまったくの無表情で見つめていた。

「さて、いくか。もうじき開場するだろう」

修は恵那に笑いかけた。そんな彼に対し、恵那は無表情で頷きを返す。いつものことなので修は別段気にした風でもなかった。鞆を肩から斜めに引っ掛けてゲートの方へと歩き出す。恵那は無言で彼の後につき従った。

チケット売り場は既に開いていた。修は大人二枚と受付の女性に言って財布をズボンのポケットから引き出した。そのとき、それまで口を閉じていた恵那は即座に口を開いて、大人一枚、ロボット一枚です、と訂正した。大人よりもロボットの方が、入場料が三百円安いのだ。

受付の女性は手を止めて驚いたようにまじまじと恵那を見つめた。女性の目に疑いの光を見て取った恵那は、自分がロボットであることを証明するために、大人二枚だと言い張る修を制止して、目から立体映像を投影させてみせた。それを確認すると、女性は納得したように頷き、大人用チケットとロボット用チケットをそれぞれ一枚ずつ取り出して修に差し出した。

何故か修はぶっきらぼうになって指定された金額を支払い、渋々ながらチケットを受け取った。安くついたのに、修が何故これほど不機嫌になったのか、恵那には理解できなかった。

チケットを購入してゲートに向かうと、既に開場時間が過ぎていたらしく、ゲートは開け放たれていた。修はそれを見るとすっかり機嫌をなおして笑顔になり、恵那の手を引っ張った。恵那は多少「驚いた」が、それを表情にはおくびにも出さず、無表情でされるがままになっていた。

「恵那、どれ乗りたい？」

チケット売り場で渡されたマップを開きながら、修は嬉々として問う。その様子をまるで子どものようだと恵那は思った。修には、もうとっくにオジサンの域に達しているであろうに、年齢を感じさせない子どもっぽさがあった。

「何でもいいです。遊園地は初めてでよく分からないので、修さんが決めてください」

恵那がそう答えると、修はそうかと嬉しそうに言って再び恵那の手をひき、目当てのアトラクションへと足を向けた。

いい年をして、修ははしゃいでいた。

ジェットコースターでもお化け屋敷でもメリーゴーランドでも、修は喜んで両腕を上げてみたり、恵那にむかってピースサインをつくってみたり、お化けを指差して笑ったりした。

平日の午前中で人があまりいなかったのも、そんな子どもっぽい修を見咎めるような人はいなかった。

はしゃいでいる修とは打って変わって、恵那は何の反応も示さなかった。

ジェットコースターに乗っても悲鳴の一つもあげないどころか表情ひとつ変えなかったし、メリーゴーランドで修にピースサインを向けられたときは流石に返したが無表情を崩すことはなかった。お化け屋敷に入っても、一体何が怖いか、何がおもしろいのかさっぱり分からなかった。

あちこちのアトラクションを試し、修が気に入ったものには何度も乗ってみたりしているうちに、あっという間に昼になった。二人でほぼ遊園地の中央に位置しているレストランコートに入り、天井近くに飾られているメニューを見にくそうに見上げた。

「俺は……カツカレーにしよう。恵那は？」

振り向いた修に、恵那は無表情で首を横にふった。

「私は朝ちゃんとバッテリーを充電してきたので、いらないです」

この返答に修は一瞬面食らったような表情をした。しかしすぐに気を取り直して財布を取り出した。

「何言ってるんだ。バッテリーで腹は膨れんだろ。お前もなんか食え」

「いらないです。ロボットの私には必要ないです。お金ももったいないですし」

「いつも食べてるじゃないか。それに俺は稼いでるから金のことなんて気にしなくていいんだよ。ほら、選べ。メニュー少ないけどな」

「食事は必要ないんですってば」

恵那は少し「むきになって」言い返した。が、修は取り合わなかった。

「お前が決めないんなら俺が勝手に決めるぞ」とレジに向かって歩いて行ってしまう。恵那は「呆れて」その背中を見つめていたが、自分のなかで「感情」がめまぐるしく活動していることに気づくと、下唇を噛んだ。そんな恵那の様子に気づくことなく、修は

「おい恵那、一人じゃ持てないから早く来い」と恵那を手招きした。

恵那は渋々ながらレジの方に向かい、自分の分のトレイを受け取った。修は恵那用にラーメンを注文したらしい。食欲をそそる温かい湯気がたちのぼっている。恵那は汁をこぼさないように慎重にトレイを捧げ持って修の後をついていった。

空いていたので席は自由に選べた。修は窓際の四人席を選んで、そこにトレイを置いた。恵那も修の向いにトレイを置いて椅子に腰掛ける。修は座るや否や、両手を合わせていただきますと言って、カツカレーをスプーンで口に運び始めた。

恵那はラーメンを前にして、どうしようかと一瞬躊躇ったが、注文しておいて食べないのも勿体ないので、仕方なく食べることにした。まあ、ロボットの自分が食べたところでエネルギーになることはないから、勿体ないことに変わりはないが。

暫く互いに無言で食事をつついた。本当に周囲に人は少なく、レストランコートは閑散としていた。しかし修も恵那もそんなことは全く気にならなかった。

修は自分の食事に集中していたし、恵那は自分がどうあるべきかについて悶々と考えながら食事を口に運んでいた。料理は特別おいしくはなかったが、まずくもなかった。まあ、こんなものかな、と許せる範囲の出来だった。

先に食べ終えたのは修だった。修はカレーを食べ終わると、食べる前と同じく両手を合わせてごちそうさまとちゃんと言ってから、グラスの中の水を一気に仰いだ。そして唐突に口を開いた。

「明後日から暫く家を留守にするからな」

恵那は口に運びかけていた箸を止めて、無表情に修を見やった。修はうっすら微笑んで恵那を見つめていた。

「今度からイランで仕事することになったんだ。ジャーナリストは忙しいからな、あちこち飛びまわらなきゃならん。数ヶ月は帰ってこれないかもしれない」

「そうなんですか」

恵那は相変わらずの無表情で相槌を打ったが、「こころ」のなかでは激しく「動揺」していた。

修がいなくなる。

自分を拾ってくれた人間がいなくなる。

自分は一人になる。

自分は、捨てられる？

自分は、またいない存在になる？

自分は、一体何のために存在する？

そんな恵那の内心が分かったのか、修は安心させるような柔らかな笑みを浮かべながら口を開いた。笑みと同じく、低いが柔らかい声だった。

「お前ひとりで家に残すのは心配だから、暫く俺の妹にお前を預かってもらうよう頼んでおいた。妹が明日お前を迎えにくる」

いきなりで悪いな、と修は苦笑しながら恵那に謝った。恵那はいえ、と言いながらも瞠目し、俯いた。

修の妹にひきとられるなら少しは「安心」だが、修は自分のことが邪魔になったのではないか、という「疑い」が胸に沸き起こっていた。押さえつけようとしても、その「疑い」は強いものだった。何度上から押し込めても、しつこく浮き上がってくるのだ。寛大な修がそう簡単に自分を捨てるはずがないという考えも恵那のなかにはあったが、しかし突然生じた「疑い」の方が、勢力が強かった。

おまえはまた、捨てられるのだ。

誰も、おまえのことなんて必要としていないのだ。

おまえは、何のために存在する？

頭のどこかでそんな声が響いた。

言葉の内容に反して、甘い声だった。

由美の手が不意に止まった。いや、正確に言えば、ペンデュラムの動きが止まったのだった。

いきなりのことだったので、由美は驚いてペンデュラムを見つめた。動かそうとしても、接着剤で空気に貼りつけられてしまったかのようにペンデュラムは動かない。こんなことは初めてだった。

止まった場所は、恵那の胸のあたりだった。またハートだ、と由美は思う。今回で恵那のヒーリングは三回目だが、三回目にして漸く何か動き始めたようだという手ごたえが由美のなかに生じた。ペンデュラムが動きを止めるなど初めてのことだったが、由美は慌てたりしなかった。心を鎮めて両目を閉じ、ペンデュラムに意識を集中させる。

どうしたのですか。何があったのですか。

ペンデュラムを介して宇宙に問いかける。イエス、ノーで答えられない質問をするのはここ最近で久しぶりのことだったので、宇宙から返事がもらえるかどうか分からなかったが、不思議と、由美のなかでは答えはもらえるという確信めいたものが鎮座していた。

宇宙は沈黙していた。

由美はもう一度暗闇のなかで同じことを尋ねた。どうしたのですか、何があったのですか。恵那ちゃんのこと、何か教えていただけるのですか。由美は根気強く心のなかで同じ問いを繰り返した。

宇宙は暫く何の答えもよこさなかったが、ペンデュラムの動きが止まって十分程が経過した頃、ようやく重い口を開いた。

この娘は、悩んでいるのだ。

即座に、何にですか、と由美が問う。しかし宇宙はまたしても沈黙し、今度は何度尋ねても何も返答を返してはくれなかった。

由美は諦めて両目を開けた。恵那を見やると、恵那はぼんやりとした顔をあげて由美の顔を見上げていた。ペンデュラムが止まってしまったことを不思議に思ったのかもしれない。彼女の顔を見て、由美はそろそろこの子に話してもらうときが来たようだと悟った。だから由美は彼女を安心させるように微笑んだ。

「恵那ちゃんは、何に悩んでいるの？」

唐突な質問だったので、恵那は咄嗟には質問の意味が分からず、答えられなかった。ぼんやりとした表情のまま首を傾げて由美を見つめ返す。次第に質問が人工脳にはっきりとした意味となって伝達されたが、何のことか恵那には分からなかった。

「別に、何も悩んでいませんよ？」

それは恵那の本心だった。いや、本心だと本人は思っていた。実際、恵那には悩んでいることなどさっぱり思いつかなかったし、悩んだ覚えもなかった。ここ最近の自分は特に何かを深く考えることもなく、ぼんやりとして過ごしていたはずだった。

しかし由美の目には、恵那が悩める年頃の女の子として映っていた。恵那は確かに何かに悩んでいるのだ。しかし本人がそうと気づいていない。確かに悩んでいるのに、どうして本人が気づいていないのか？

ここで、由美は一回目の治療のときに、自分がおかしいと思ったことを思い出した。あのとき、確かに何かおかしいと感じた。何か違った。その答えが、今、導き出されそうだった。

だから由美は懸命に第六感を働かせて、中断してしまった恵那のヒーリングを再開しようとした。ペンデュラムは暫し動くのを躊躇ったが、由美の切実な思いに根負けしてか、重い腰をあげてのろのろと円を描き始めた。反時計回りの円だった。

おまえは、何のために存在する？

不意にそんな声が頭のなかいっぱい響いたので、由美は驚いて声をあげそうになった。しかしすんでのところと思いとどまった。ペンデュラムは相変わらず反時計回りに回り続けている。

今の声は何だったのか。甘い、可憐な少女のような声だった。砂糖菓子を連想させるような響きだった。

しかしその響きとは裏腹に、言葉には否定的なニュアンスがぎっしりと詰まっていた。質問口調ではあったが、まるで、お前などいらないとでも言われているかのような、そんな言葉だった。

まさか。そこで由美ははっとした。この声は、恵那の頭のなかに響いている声なのではないか。

由美の直感がそうと告げていた。何かがおかしいと感じ原因が、この声にあるような気がした。

由美はヒーリングを中断して恵那から離れ、電話台に向かった。そして電話帳をめくりながら受話器をとり、万が一の時のためにと思ってメモしてあった電話番号を見つけ出して受話器をとってそこにかける。

もしかしたらこの一回では繋がらないかもしれないと思っていたのに、予想に反して電話は意外とすぐに繋がった。電話ごしに相手と小声で会話を交わし、約束をとりつける。妙な胸騒ぎがしていた。急がなければならないと頭のどこかで警鐘が鳴っていた。だから由美は恵那の了解も得ずに電話をかけた。

受話器を置くと、由美は恵那を振り返った。恵那はぼんやりとした面持ちながらもどこか不思議そうな表情で由美を見つめていた。由美は真剣な表情で彼女を見つめ返した。

「恵那ちゃん。ちょっと遠いけど、今から研究所に行こう」

恵那は首を傾げたが、由美はそんな彼女の反応を気にした風もなく、勝手に出かける準備を始めた。

「赤井さん」

白衣を着て黒縁の眼鏡をかけた男が、足早に近づいてきたので、由美は立ち上がって彼を出迎えた。軽く会釈をすると、男ははっと気づいたかのように慌しい会釈を返す。その後、男は手にした書類に目をちらと落としてから、ずり落ちてきた眼鏡をかけなおし、由美に向き直った。

「澤田さん、お久しぶりです」

お久しぶりです、と返す澤田。余程興奮しているのか、挨拶もそこそこに彼は本題を切り出した。

「赤井さんがおっしゃった通り、恵那さんに異状が見つかりました。言われなければ誰も気づかないような異状です。まさか、あんなものを開発するひとがいるなんて、予想もしませんでしたよ」

目を輝かせながら澤田は言うが、由美としてはそんなことは喜ばしいことでも何でもなし。むしろ困ったことである。だから由美は困ったように澤田を見やった。しかし澤田は興奮したまま話を続ける。

「あと少しでも発見が遅かったら、間違いなく恵那さんのなかに生まれた『ころ』は破壊されていたでしょうね。しかし本当に驚きです。折角ロボットのなかに生まれた『ころ』を破壊するようプログラミングされたウイルスが開発されていたなんて。『ころ』が生まれたかどうかを判別するのも難しいことなのに、形のない『ころ』を破壊するなんて尚のことプログラミングするのは不可能に近い。それを、マイナス思考を促すことで、ロボット自身に『ころ』を否定させるとは、開発したひとは余程天才だったに違いありません」

「澤田さん」

由美の咎めるような口調に、澤田ははっとした表情を浮かべた。

「す、すみません。つい熱くなってしまいました」

反省して頭を下げる。途端、腕のなかの書類がばらばらと床に落ちた。慌てて屈んで散らばった書類を拾い集める。由美は嘆息して、同じように屈んで書類を集めるのを手伝った。手伝いながら澤田に問いかける。

「恵那ちゃんは、大丈夫なんですか？」

無事集め終えた書類を何とかしてもとの順番に戻そうと苦心しながら、澤田ははい、と頷いた。

「今のところ、安静にしておかなければなりません、大丈夫ですよ。ウイルスは取り除きましたし、他に異状は見当たりませんから。あとは彼女次第ですね」

「恵那ちゃんのところに案内していただけますか？」

「はい。こちらです」

澤田は先に歩き始めた。由美は慌てて彼の後についていく。澤田は脚が長いのか、歩く速度が速かった。由美は遅れないように脚を早めながら必死になって一定の間隔をあけて彼のあとに続いた。

研究所の長い廊下を突き進んで、階段を上がる。三階まで上がると、澤田は再び長い廊下を歩いていく。暫く歩き、何度か曲がり角を曲がって三〇七と書かれたプレートがかけられている部屋の前に来ると、澤田は立ち止まって由美を振り返った。ここです、と言ってドアを開ける。先に由美が入り、澤田は後から入ってドアを閉めた。

そこは大部屋ではなく、個室だった。真っ白で清潔な空間におかれた一台のベッド。

窓は少し開いており、水色のカーテンがそよそよと揺れている。部屋と同じく白いベッドの上に、恵那はシーツを顎のあたりまでひき被って、目を閉じていた。

由美が近づいていくと、恵那はすっと目を開けた。そして頭だけ動かして由美の方に視線を向ける。二人の視線が落ち合った。

「澤田さん」

由美が恵那と視線を合わせたまま口を開いた。

「暫く、席を外しておいてもらえますか」

彼に背を向けたままの由美には見えなかったが、澤田は素直に頷き、扉を開けて部屋を出ていった。扉がしめる音がして、見詰め合う二人のいる部屋のなかには静寂が満たされる。

時折、カーテンが窓枠を擦る微かな音しか、二人の鼓膜を揺るがす物音はなかった。澤田はドアの外で待機しているのだろうか。まさか盗み聞きしようというような幼い真似はしていまいと由美は考えた。もっとも、盗み聞きされて困るような会話など、由美と恵那の間に起こり得るはずもなかったが。

由美はベッドのすぐ脇に立った。恵那が横たわったまま由美を見上げた。その端整な顔に、表情という表情は浮かんでいなかった。ただ、瞳にはわずかに感情が残っているように由美には感じられた。由美は彼女に笑みを落とした。

「具合はどう？」

恵那はばちばちと数度瞬きをした。

「大丈夫です。異状はどこにも感じられません」

きわめてロボットらしい返答を、恵那は由美に返した。由美は一瞬不意をつかれたような表情を浮かべたが、すぐに柔らかな笑顔に戻って恵那を優しく見下ろす。

「恵那ちゃんは、やっぱり、『苦しんで』いたでしょう」

恵那は黙って由美を見上げた。それが、彼女の答えだった。由美は沈黙を気にせずズボンのポケットからペンデュラムを取り出し、先を続ける。

「恵那ちゃん、自分の存在を、もてあましていないんじゃないかな。『ころ』が生まれたばかりに、自分をどう扱っていいのか分からないんじゃないかな。自分はいくまでロボットであるけれど、『ころ』を持ってしまった。『感情』が胸の内に芽生えてしまった。そのことに、まだ戸惑っているんじゃないかな」

チェーンの先の水晶は、ぐるぐると時計回りに回り続けていた。由美はそれを確かめ、一旦言葉を切ると、恵那の口が開かれるのを待った。恵那はただ由美をじっと見上げるだけで、口を真一文字に引き結んでいた。部屋にはまた静寂が舞い戻ってきた。

恵那から言葉を引き出したいとは思ってはいたが、由美は急かすような真似はしなかった。

幸いにも時間はある。急ぐ必要はどこにもない。ゆっくりと少女から答えを引き出せば、それでいい。

そう思って気楽に構えていたから、恵那が十分と経たないうちに口を開いたのは、由美にとってはかえって予想外のことであった。

「修さんは、どうしてイランから帰ってこないのでしょうか」

恵那は虚空をぼんやりと見つめながら自分に問いかけるかのように呟いた。

「修さんがいなくなってから、もう三年になります。修さんは、今、どうしているのでしょうか」

由美は恵那を見つめながら眉を顰めた。

修のことは、美菜から聞いていた。あのときの美菜の嘆きようはすさまじいものだった。

美菜は修と仲がよかったから、あの落ち込みようは当然のことだったろう。

しかし、美菜は由美にとっても意外なほどすぐに立ち直った。それは、恵那のためだった。恵那がいたから、美菜は立ち直れたのだと由美は知っている。

修がどうなったかということは、恵那にもちゃんと分かっているはずだった。なのに、今ここで、恵那は修のことを

由美に聞いた。それは、何故か。

「本当は、分かっているんです」

由美が答えられないでいると、恵那が自分で言った。

「修さんはもういないんだってこと、分かっているんです。この世のどこにも。でも、どうしても信じられなくて。信じたくないと思ってしまう自分がいて。そんな自分があることが、訳が分からなくて」

どうしたらいいのか、分からないんです。

そう言って恵那はくしゃりと顔を歪めた。その大きな瞳から、涙が流れることはなかった。由美はそれを不憫に思った。

本当は、声を上げて泣きたいのだろう。思う存分、涙を流したいのだろう。

しかし、それは恵那にとっては叶わぬ夢だった。

声を上げて思い切り泣く。そんな、人間にとっては当たり前行為が、恵那には許されない。

由美は彼女の頭をそっと撫でた。恵那は顔を歪めたまま、口を開いた。

「自分の『気持ち』が分からないんです。自分は一体どうしたいのか。どうしたかったのか。ただ、ずっと暗闇のなかにいるような『気分』なんです。修さんにもう一度会えるなら、と思う自分がある一方で、もし仮に会えたとして、自分は一体修さんに何を言いたいのか、分からないんです」

そして、自分の存在が一番分からないんです。

「いつかは美菜さんも、由美さんも、修さんのように私の前から姿を消す日が来るでしょう。それは遠い未来の話かもしれないし、もしかしたら明日のことかもしれない。その日がきたら、私は一体どうしたらいいんでしょう。私はこのまま、色んな人が私の前を通り過ぎてゆくのを永遠に見続けなければならないのでしょうか？ それなら、いっそのこと早く壊れてしまった方がましです。ウイルスがあるなら、『こころ』を破壊してくれればよかったのに」

恵那は布団のなかから引き出した自分の両手で顔を覆った。由美は暫くそんな恵那をじっと見下ろしていたが、彼女の両手を顔からむりやり引き剥がして、彼女と視線を強制的に合わせた。恵那は当惑したように由美を見上げた。

「あのね。どんなことにも意味があるの。私たちが生きていることも、修さんがいなくなってしまったことも、恵那ちゃんに『こころ』が生まれたことも。どんなことにも、大事な大事な意味があるの。神様が与えてくれた、チャンスなの。だから、そんなに悲観しては駄目。前を向いて。あらゆることに隠された意味を見つけ出して。そうすればきっと、自分が一体何をしたいのか、どうしたいのか、見えてくるはずだから」

信じて。恵那の両手を握りしめたまま、由美は力強い声でそう言った。恵那は由美をじっと見上げたまま、何も言わなかった。

「はい、今日の治療はこれで終わり」

由美がぼんと恵那の両肩に手を置いて終了の合図をすると、恵那は椅子から立ち上がって少し伸びをした。そしてくると振り返って、頭を下げる。

「今日もありがとうございました」

「いえいえ、どういたしまして」

恵那の無表情も大分見慣れてきた。差し出されたヒーリング代を受け取り、由美は笑顔を恵那に向ける。

「何か飲んでいかない？ コーヒーでいいかな」

「あ、ありがとうございます。じゃあコーヒーで」

そう言いながら、恵那は壁に飾られた絵にちらちらと視線を投げている。どこかそわそわとした様子の彼女に、由美はくすりと笑った。

「由美さん。なにも、こんな、目立つところに飾らなくても……」

「あら、いいじゃない。よく描けてるわよ。私、この絵気に入ってるもの」

「だからって……」

恥ずかしそうに頬を掻く恵那。由美は、コーヒーを沸かしに行きながら、そんな彼女を微笑ましく思った。未だに笑顔は見られないが、最近、恵那の顔に表情が少しずつ増えてきた。態度からも、恵那がどんな「感情」を抱いているのか、少しだが分かるようになってきている。それは大きな進歩だと由美も美菜も満足していた。

お湯が沸くのを待っている間、由美は恵那が困ったように見つめている絵に視線を向けた。

額縁のなかでは、一人の男性が笑みを浮かべてこちらを向いていた。

その男性の笑顔を見ていると、不思議と笑顔が浮かんでくる、そんな不思議な絵だった。

由美はこの絵を自分だけが楽しむのというものももったいないと思ったので、クライアントにも見えるように、こうして仕事部屋の目立つところに飾ったのだ。実際、この絵の評判はとてもよかった。

「画家でも目指したらどう？」と由美はちやかすように語り掛ける。

「……やめてくださいよ。ただのお絵かきですから」

と言いながらも、恵那はまんざらでもなさそうだ。視線を絵から外さずに、コーヒーが出来あがるのを待っている。

そんな恵那と絵画とを交互に見つめていたら、やかんが大袈裟な音を立て始めた。由美は慌てて火を止めに行く。

恵那の「こころ」は、とても「穏やか」だった。

FIN